

## プロローグ 終わりの始まり

「今日もあたしは完璧！だから、一人でだって何とかして見せる！」

月明かりの下、淡い紫色の髪がふわりとなびく。

私の名前は蒼乃 美希、私立鳥越学園に通う、普通の女の子……だったはずなんだけれど、今は違う。今の私は、

「プリキュア・エスポワールシャワー！」

私の両手がスピードの形を描くと、青色の光が目の中の巨大な影へと飛んでいく。

そう、私はプリキュア。世界を守る完璧なヒーロー、ううん、完璧なヒロインとして、四ツ葉町に現れるナケワメーケと戦っているの。

そして、もう一つの私の名前はキュアベリー。長く伸ばした青い髪を高い位置で結んだポニーテールと、青と白を基調にした、すっきりとしたラインのコスチュームが完璧な私を更に研ぎ澄ませてくれる。

こんな完璧な私が、ナケワメーケなんかには負けるはず無いんだけど……

「嘘！？ 攻撃が外れた！！」

私の必殺技は、巨大な影を彷彿とさせる化け物、ナケワメーケの横を掠めると、後ろの建物にぶつかり消滅する。

正直な所を言うと、今日の私は調子がおかしい。早朝からのモデルのお仕事に学校の勉強、ここ数日毎日のように現れるナケワメーケの退治と、確かに最近はやっとだけ忙しいけれど、この完璧な私が、蒼乃美希が、負けるはずなんてないのだ。

「遠距離がダメなら接近戦で！」

心の片隅に浮かんだ嫌な感情を吹き飛ばし、アスファルトの地面を私は駆ける。ナケワメーケとの距離を一気に詰めると、キュアベリーの得意技である飛び蹴りを、敵にお見舞いした。

脚に伝わる衝撃が、私の勝利を予感させる。

「え？ 嘘！？ きゃあああああ！！」

しかし、ナケワメーケの顔にめり込んだ私の脚は、まるで膨らんだゴム風船へと蹴り込んだかのように弾かれ、全身が地面へと叩きつけられる。

少しだけ痛む体を、両手と両足で持ち上げようとした瞬間、ナケワメーケの予想外の行動に、私は体を強張らせた。

「……無駄だ。お前の攻撃など、私には通用しない」

「ナケワメーケが……しゃべった？」

獰猛な鳴き声を上げるだけの怪物だと思っていたナケワメーケが、私に向かって言葉を投げ掛けてきたのだ。

「だ、だからなんなのよ。ナケワメーケがしゃべったぐらいで、いつもと変わらないんだから！！」

いつもと違う状況に動揺してしまう私だったが、胸の内に不安をしまい込むと再び地面を駆け、ナケワメーケのお腹に蹴りを入れる。

先程の反動を意識し、体ごと弾き返されぬようにと、しなやかに打ち込んだ私の攻撃の数々を、まるで無意味と言わんが如くナケワメーケは口角を上げる。

「……通用しない。キュアベリーよ、既にお前は、私の手の内に」

「ふざけないで！ 私はプリキュア。そんな言葉で、あきらめたりなんかしないんだから！！！」

完全に嘲笑われている。敵の、それも、ラビリンスの幹部でもない、ただのナケワメーケなんかに。

それがただ悔しくて、私はただがむしゃらにナケワメーケに足技を叩き込む。

「愚かな……」

「うっ！ あああああー！！」

まるでバレリーナの演技のように、完璧なはずの私の攻撃は、ナケワメーケに傷一つ負わせることができず、私の体は敵が発した衝撃波によって、再び地面へと叩き伏せられた。

「なんで、なんで通用しないのよ」

焦りが募る。あの時の、初めてプリキュアとして戦った時の苦い思い出が、頭の中を駆け抜けて私の心を責め立てる。

思い通りに動けなくて、ラブに迷惑をかけたあの瞬間を……私は、忘れない。

「美希ー!!」

「美希ちゃん！」

「美希！」

唇を噛みしめながら立ち上がった次の瞬間、後ろから三人の、聞き覚えのある女の子達の声が聞こえてくる。

キュアピーチ・桃園ラブ

キュアパイン・山吹祈里

キュアパッション・東せつな

三人の、頼れる仲間達が私の元に駆けつけてくれたのだ。

「な、何よ、そんなに慌てて。私なら、一人でも大丈夫なんだから」

「そんなボロボロの衣装で言っても、説得力なんて無いわよ」

「そうだよ。私たち、仲間なんだから」

「うん！美希を傷つけるなら、私が……私達が許さない！」

「ラブ……みんな……」

迷惑をかけたたくない。その裏側に見え隠れする私の強がりやを、容赦なく見通すせつなには言いたいことがあったけど、祈里とラブの言葉に目頭が自然と熱くなる。

私は、完璧かもしれない。それでも、たどり着けない景色というのは確かにある。そう、私達はチームだ。だから、一人で意地を張る必要なんてない！

「……揃ったか。キュアベリー、お前の終わりは、既に始まっている。お前は逃げられない……永遠に、私の牢獄の中で」

「ちよつと、それってどういう意味……あ、こら！ 逃げるな！」

フレッシユプリキュアが全員揃い、これから反撃！ と思った瞬間、ナケワメーケは意味のわからない捨て台詞を残しながら影となって消えてしまう。

急いで追おうとナケワメーケのいる場所へと駆け寄るが、既にそこには何もなく、文字通り影も形もなくなってしまっていた。

「なんだったのよ、あいつ」

辺りを警戒しながらも、私は一つ大きく息を吐く。



危なかった。皆が来なかったら私どうなっていたことか……なんて思いたくなかったけれど、私の両足は自然と震え、呼吸も荒くなっていく。恐怖。私の心は、その感情に支配されていた。

「美希、大丈夫？ 怪我とか、してない？」

「怪我……う、うん！ 大丈夫、大丈夫！ もう、ラブは心配性だなあ。皆が来なくても、私一人で倒せちゃうところだったんだから」

けど、弱い所なんて見せられない。特に、ラブには見せたくなんかない。

完璧な私が、世界一の親友に弱い所なんて見せられるはずがないのだ。

「でも、美希ちゃんの服、ボロボロ」

「いいのよ、放っておけば。本人が大丈夫、って言ってるんだから」

「でも……」

「祈里、放っておきなさい」

「うう、せつなちゃんまで」

「大丈夫だって祈里、ほら、帰ろう。明日も皆学校だし、私も仕事だから早く寝ないと」

そして、私を心配してくれるもう一人の親友に嘘をつくと、私は一つ伸びをしながら軽口を叩き歩き出す。

私の心を見透かすようなせつなの態度は気に入らないけど、今回に関して言えばとても助かった。祈里はとても仲間思いだから、ラブとは違う理由で心配をかけられない。

しかし、何故だろうか。何だかとても嫌な予感がある。

ナケワメーケが最後に言ったあの言葉が、頭の中で反響し、私の心へと刷り込まれていく。私の終わりは始まっている？ 逃げられないってどういうこと？ 牢獄って何？

私達四人が揃ったことに対するあいっつなりの負け惜しみ、って考えることも出来るけど、私の中の直感がそれを否定していた。

言葉を話す謎のナケワメーケの出現。それが私の、私達の、全てを壊す始まりだと言うことを、まだ誰も知る由はなかった。

## 第一章 揺れる不安の方程式

それから、私は顔を俯かせながら、誰にも表情を悟られないよう自宅まで走り抜ける。

「ただいま」

玄関の扉を開け小さな声で帰った事を知らせると、乱雑に靴を脱ぎ捨て二階へと駆け上がる。そして、急いで自室へ飛び込むと、ドレッサーの鏡の前で私は立ち尽くす。

「……ははは、何やってるんだろ私」

乾いた笑いが口から漏れると、誰にも見せたことがないとても不細工な蒼乃美希が、鏡の中に立っていた。

髪は乱れ毛先はボロボロ、目は少し腫れていて、顔色と唇は最低に近い真っ白。

こんな顔を見せたら、みんなはどんな風に思うだろうか？ 軽蔑、するだろうか？

「あんな風に取り乱して、みんなに当たり散らかして……ほんと、最低」

ラブを困らせて、祈里に心配かけて、せつなにあんなに酷い受け答えをして……本当は  
せつなのこと、ちゃんと仲間だって受け入れてるはずなのに、なんで、なんでこん

な……

（嫉妬、してるんでしょ？ せつなに）

思わず私は息を飲み、鏡の中の自分を見つめる。まるで、鏡の中の私が生きているかの  
ように、私の心を嘲笑う。

（ラブの隣とられちゃったもんねー）

動悸が激しくなる。ラブの笑顔が浮かぶだけで、心臓が締め付けられるように痛い。

「ち、違う！ 私、そんな」

(「違わないでしょ？ だって、大好きなラブだもんね。昔からずっと」)

鏡の中の意地悪な自分が、偽りの私を容赦なく責め立てる。初めて出会った時から、あの無邪気で真っ直ぐなラブの笑顔に、私は惹かれていた。だって、あの子のあの笑顔は、私には無いものだったから。

## 第二章 敗北のつぼみは影に吸われて

リンクルの反応が強くなる方へ走り出してから十数分、たどり着いたのは、四ツ葉町の外れにある、使われなくなった廃工場。その中に一つ、黒い人影が私を待つように立っている。

「目標、確認。キュアベリ―」

「目標ね……理由は良くわからないけど、私を狙ったこと、後悔させてあげる」

私の鼓膜に響く前回と変わらない無機質な声音に、恐怖よりも苛立ちを覚える。

こいつが事の元凶、こいつさえいなければ、私は完璧な蒼乃美希でいられたのに……だから、だから。

「いくわよ！」

スカートのポケットからリンクルンを取り出すと、もう片方のポケットからリンクルンキーを取り出す。そして、リンクルンキーをリンクルンの上から差し込み回すと、開いたリンクルンのボタンにそっと触れる。

「チエエエエンジ、プリキュア！ビートアップ！！」

青い光が私の体を包み、意識がすっと軽くなる。そして、気合一閃、右足を踏み鳴らすと同時に集中力が増し、私の足はまるでアイススケートを滑るように回転しながら進んでいく。



気持ちいい風が吹き抜けて気が引き締まると、青色の髪が淡い紫色へと変わり、ふわりと柔らかくも、鋭く巻かれたポニーテールを形づくる。それと同時に、青と白を基調にしたすつきりとしたラインのコスチュームが私を包み、更に研ぎ澄まされた完璧を演出。アクセサリーを全て身につけた私は、もう一人の私、キュアベリーとなり勢い良く飛び上がる。と地面へと降り立った。

「ブルーのハートは希望の印！」

両手で胸の前にハートを形作ると、スラリと引き締まった完璧なプロポーションを引き下げた理想の私は、ハイヒールの音を鳴らし、高らかに名乗りを上げる。

「つみたてフレッシュ、キュアベリーー!!」

変身を遂げ、キュアベリーーになった私は、完璧に美しくカッコいい。

希望の印なんて言うのも、まるで私の名前を象徴しているようで、心の奥底から気に入っていた。

「昨日は油断したけど、今日は上手くないんだから!」

人差し指をナケワメーカーに突き立てると、一気呵成に私は地面を駆ける。

そう、昨日は油断しただけ。油断しただけなんだから! こいつは、いつものナケワ

メーカーとは違う。ちゃんと判断できてれば、完璧な私が負けるなんて……あり得ない!

まずは様子見と、私は右ハイキックをナケワメーカーの顔面に叩き込む。その瞬間、昨日と同じように弾き返された右足を瞬時に軸に切り替え、左足を鋭く首筋に叩き込む。

顔や胴体に比べれば手応えがあったが、どうやら致命傷には程遠い。それでも、ここが弱いと言うのなら、何度だって蹴り倒すのみ！

そう考えた次の瞬間、ナケワメーケの両手がわなわなと震えると、複数の細い鞭状に変形する。それが、ゆっくりと私へと近づいてくるのを確認すると、右足で踏み切り後ろへと飛び上がる。

防御は凄いけど攻撃は遅い。なら、昨日の衝撃波にだけ気を付ければ……と安堵した直後、私が元いた場所へとたどり着いたナケワメーケの腕が、一斉に私のお腹へと向けて伸び始めた。

「嘘！？ぐっ、ああああ！！！」

衝撃。私の体は後方へと弾き飛ばされ、地面へと叩きつけられる。

想定外の行動に反応しきれなかった私は、あまりの悔しさに下唇を噛む。

また、やられた。

予備動作の短さに初速の遅さ、そして擬態。まるで、私の長所である速さを殺してくるような動きに私らしくもない舌打ちが漏れる。あれはもう鞭じゃない、意識を持った触手だ。

「うわ、気持ち悪」

わななくように動くナケワメーケの黒い触手の群れに、私の口から本音が漏れる。祈里辺りが見たら、あまりの気色悪さに泣き出してしまいそうなほどリアルな動きだ。

それに、今の攻撃で受けたお腹の痣……やっぱり、いつものナケワメーケの攻撃とは少し違う。痣の色が普通の痣と違って少し黒々としていて、長時間眺めていると私だって不安になってくる。

たぶんだけど、プリキュアの力を阻害する何かをこいつは持っていて、私達を倒すためにラビリンスが作り出した尖兵。プリキュアキラー……なんてベタな名前はつきたくないんだけど、その中でも対ベリー、私専用に対策された個体って考えるのが一番納得がいく。

そう考えれば、私を執拗に狙ってくるのも説明がつくし、私の考えが正しいなら、ここは一度引いて、みんなと合流した方が……逃げる？この私が？完璧なベリーが二度も逃げらるって言うの？

「……冗談じゃないわよ」

怒りで爪が拳にめり込み、闘志が私を立ち上がらせる。

昨日だってそう、みんなが助けにこなければ、あいつはきっと逃げ出さなかつたはずだ。  
だから、今逃げたら、私はきつと二度も逃げたことになる……そんなの、私が許せない！

### 第三章 完璧が壊れる音

「放して、放してよ！ 私は、まだ、負けてない！」

折れかけていた心とプライドが、その瞬間一気に蘇る。

しかし、力が抜け、ぐったりとしてしまっている体に、触手を引きちぎる力など残っておらず、私の体は180度回転させられ、薄汚れた工場の壁へと背中から叩きつけられる。

一瞬肺がつまったものの、それ自体に攻撃の意志は感じられなかった。

「第二フェーズへ移行。キュアベリーに対する本格的な凌辱を開始する」

「これ以上、好きかってになんかささせな……ひゃあん！！」

触手が股下を撫で上げた瞬間、私の体を電流が駆け抜ける。

滴り落ちる水の音と、直に触れた触手の感覚で私が今置かれている状況がどんなものなのかに気がついた。私、今、下着……履いてない……!?

カフスとブーツだけじゃなく、エッチな思いに反応して、リンクルンがベリーのブルマを、私の下着を消してしまったのだ。

「嘘、嘘でしょ？　こんな、辱しめ、キュアベリーなのに……ひい!？」

太ももを伝う熱い液体の感覚と、下着を履いてない、お尻もおまんこも丸出しの正義のヒロインという状況が私の頬を赤くさせる。

しかし、あまりの屈辱と羞恥にうち震えていた私の現実には、ナケワメーケの股間から生えた、てかてかと光ったグロテスクな巨大な棒状のものによって引き戻された。

なに、これ？　私、知らない。



「擬態ペニスの膨張を確認。勃起成功。キュアベリーのおまんこに挿入を開始する」

ペニス？ ペニスってことは、おちんちん？ 昔、パパのを見たことがあるけど、こんなに大きくなかった。

人間のものとは思えない、圧倒的な大きさに恐怖を感じていると、その先端がベリーのスカートを掻き分け、おまんこの入り口に触れる。

何をやって？ 何をやって？ ……ま・さ・か！？

「ま、ま、ひぎい！！」

ペニスの先端が私の入り口を開き、体内に熱いものが入り込む感覚。そして、おまんこの中を押し広げられた瞬間に、何かが引きちぎられるような強烈な痛みを感じ、私は悲鳴を上げる。

そこまでされてやっと、私は今置かれている状況を、本当の意味で理解した。

「わた、私のしよじよ、処女があ、こんな化け物になんか、ナケワメーカーなんか  
にいい！」

この瞬間、初めて私は、自分が性的な話題から目を反らし続けて来たことを後悔する。

ラブや祈里、他の女の子達の話に耳を傾けていれば、せめてこんな、何の覚悟も無しに、  
私の大切な処女を散らされる事なんて無かったはずだ。

悔しい、悔しすぎて涙が溢れてくる。ナケワメーカーにここまでされて、負けを認めるな  
んて絶対に嫌だ。嫌なはずなのに……

「あん、ああん！こんなあ、こんなのって」

おまんこの中が擦れる感覚、そして最奥に突き刺される痛みが気持ち良さに変わって  
いく。

二度、三度と力強く突かれる度に、甘い声が止まらない。

「いやあ、いやなのに、なんで、こんな、へんな、こえ、でる、のお!？」

「キュアベリーの快樂値上昇を確認。子宮口へのピストンを継続」

「かい、らく。これ、かいりやく。しきゅう、よろこんれええッ!」

なんて声を出しているのだろう。思考が甘く蕩けきつて、舌が回らない。

それに、これが快樂。おまんこの奥が気持ちよくて、子宮が喜んで、喜んで……

「わらし、きゅあべりーらのに、ふいきゅあらのに、こんなかいりやくに、かいりやく

にいいいい!!」

キ○アベ○ー陥落く完璧の崩壊く（フレ○リ全滅 蒼乃○希編）サンプル版

著者・a r t i f i c i a l s k y

発行日・二千二十五年十二月